

絵本部会通信 13号 グローバリズムを育む絵本

国際幼児教育学会第42回大会 絵本部会ワークショッププログラム

紹介号

残暑の候。みなさまいかがお過ごしでいらっしゃいますか？絵本通信13号は、9月26日の絵本部会オンラインWORKSHOPでご登壇いただく先生方がお話される絵本を一足先にご紹介いたします。では当日みなさまと画面でお会いできるのを楽しみにしております。

I 多様という普遍を志して 国際幼児教育学会絵本部会会長 宮地 敏子

『あおくと きいろちゃん』
作：レオ・レオニ 訳：藤田圭雄 至光社
(1967)



戦後、E.スタイクン編写真集『人間家族』にアート・ディレクターとして関わったレオ・レオニ。彼が広告誌をちぎった青い○と黄の○の話。5歳と3歳の孫に作った初めての絵本。やっと会えた青と黄は嬉しくて抱き合い緑になる。楽しく遊んで家に帰ると双方の親に拒否される。泣いて泣いて泣き切って、青と黄に再生、親たちも認める。異質のものが出会い影響し合い、試練を超え何か新たな理解や価値が生まれる予感。

II グローバリズムを育む絵本 実践報告

石川 由美子

宇都宮大学共同教育学部/宇都宮大学大学院地域創生科学研究科 教授

『リリのさんぽ』
作・絵：きたむらさとし 平凡社 (2005)



お散歩が大好きなリリは子犬のリッキーとお散歩に出かけます。

同じ街並みを歩いているはずなのに、リリとリッキーは全く異なる対象に出会い、異なる体験をしています。リリが体験する世界は絵とことばで語られ、リッキーの体験は絵で語られます。ページをめくると2つの物語が同時並行で語られていく、これは絵本でしかできない表現方法でしょう。グローバルをどうとらえるのか難しいのですがこの絵本を題材に考えてみたいと思います。

上村 瑞枝

認定こども園 ゆりかご幼稚園副園長

『おかあさん』

作：シャーロット・ゾロトウ 絵：アニタ・ローベル
訳：みらい なな 童話屋 (1993)



お母さんのアルバムの写真を見てお母さんの過去を紐解いていく女の子。自分のお母さんが赤ちゃんだった頃、子どもだった頃、ボーイフレンドがいたこと、お母さんが大きくなって結婚して自分が生まれたこと。おかあさんも自分と同じ子どもの時期がありお母さんと自分の成長を重ねることで読み聞かせしてもらった子どもと母親で経験を通しての感情を共有できるように思う。子どもが自立する為に必要な経験が出来るように母親の忍耐を応援して母子分離を助ける絵本でもあると感じる。

松田 ミカ

国際協力機構 JICA 筑波 図書情報室司書

『あたし、メラハファがほしいな』

ーさばくのくにモーリタニアのおはなし』

作：ケリー・クネイン 絵：ホダー・ハッダー・デー
訳：こだまともこ 光村教育図書出版 (2014)



サハラ砂漠が広がる国、モーリタニア。主人公の女の子は、お母さんやお姉さんのかぶる 秘密めいた美しいメラハファに憧れています。でもいくらメラハファがほしいな、って言ってもみんな微笑むばかり。主人公がメラハファを身に着ける本当の意味に思いがいたった時、はじめてお母さんがメラハファを用意してくれます。国や宗教によるそれぞれの価値観について考えることのできる絵本です。

何 偉

中国安徽省銅陵市福祿貝爾兒園園長、
福祿貝爾繪本館館長

『 溪边的孩子(ストリームの子ども) 』

作：彭懿 絵：王祖明

接力出版社 (2020)

表紙書影掲
載不可

https://www.jielibj.com/book_7062.html

成田 望・松本由美

玉川大学教育学部 4年・玉川大学教育学部

『 とんとんとん 』作：あきやまただし

金の星社 (1997)



これは“ぼく”が小さかったとき山里に住んでいたころの物語だ。山里から外につながっている道は“ヨンアンシ”という一本の川だけだった。“ぼく”の家は“ヨンアンシ”の畔にあり、ここには“ぼく”と兄貴のいたずらわんぱくな物語がいっぱい詰まっているんだ：豚小屋に落ちてしまったこと、“ヨンアンシ”の中に落ちてしまったこと、隣近所の養魚場に潜り込んで魚を取ったりしたあげく父ちゃんにたくさんのお金を賠償してもらったこと、兄がこっそりと結婚式のお酒を飲んで、酔っぱらって水亀のそばで倒れてしまった。村びとたちに試験場まで運ばれどうにか試験を受けたが、なんと全学年でトップの成績をとってしまった……。ぼくらにとって、何より楽しかったのはお正月のことだ。大人たちはいろいろなご馳走を作るが、父ちゃんは“ぼく”をばあちゃんの家に入れていって、ばあちゃんの昔話を楽しんだ……。三十年後、“ぼく”はその時の大人たちのように清明節のご馳走を作りながら、昔話を思い出しながら、ばあちゃんから聞いた童謡を口ずさんだ。(原文中国語 日本語訳：劉郷英先生)

主人公の女の子が、お友達のかずきくんから手紙をもらい、家に遊びに行くお話です。手紙に書いてある場所へ着くと大きなマンションで扉がいっぱいあってかずきくんの家がどれなのか分かりません。「とんとんとん」と緑色のドアをたたくと、カバの親子が出てきました。次に茶色のドアをたたくと、うさぎさんがパーティーをしていました。このようにドアをたたき、かずきくんのおうちを探していきます。ドアをたたき誰が出てくるかわくわくできる絵本です。

Ⅲまとめないまとめ

絵本部会副部会長 山岡 テイ

情報教育研究所所長

『いろいろ いろんな かぞくのほん』

作：メアリ・ホフマン 絵：ロス・アスキス

訳：杉本 詠美

少年写真新聞社 (2018)



世の中の家族はいろいろ。大家族もいれば、二人家族も。「家族のカタチ」はお父さんだけ、お母さんだけ。お母さんが二人、お父さんが二人の家。おじいちゃんやおばあちゃんと暮らしている子もいるし、養子や里子として迎えられた子や混合家族もいます。園や学校へ行く子も行かない子も。いろいろな家族の暮らし方があって、住むところや仕事、食べ物、お祝い事や好きな事も違っていても、家族ってそれぞれが素晴らしい！

絵本部会副部会長 山田 千明

共栄大学教育学部教授

山梨県立大学名誉教授

『りんごかもしれない』 ヨシタケシンスケ 作

ブロンズ新社 (2013)



テーブルの上にある「りんご」が学校から帰宅した子の目に入る。それを見て、「…でも…もしかしたら これはりんごじゃないのかもしれない。」と思う。「ぼくからはみえない はんたいがわはミカンかもしれない」と「もしかしたら…」という楽しい奇想天外の空想の旅に出発進行。ストーリーの後半では「ふつうのりんごかもしれない。」と、「りんご」をつついたり、匂いを嗅いだりして食べ「おいしいかもしれない」と結ばれる。

Ⅳおわりにかえて

国際幼児教育学会

絵本部会事務局

〒194-8610 東京都町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学教育学部 教育棟 松本由美研究室

(掲載の絵本表紙書影は許諾を得て掲載しています)

絵本がもたらした我が家のグローバリズム『まあちゃんのながいかみ』

表紙いっばいに渦巻く見事なおさげは、主人公まあちゃんの髪。髪の毛の短いまあちゃんが、長い髪自慢のはあちゃんと、みいちゃんを前に繰り広げる理想の長い髪自慢は「そのながいこといたら」でスイッチオン。おさが釣糸になってお魚を釣ったり、大樹になって小鳥たちの家になったり、まあちゃんの髪は果てしない想像力とともにどこまでも伸びていきます。最終場面の「まあちゃんのかみ、はやく のびるといいね。」は子どもたちの夢をどこまでも膨らませてくれます。
(松本由美 玉川大学教育学部教育学科准教授)



『まあちゃんのながいかみ』作・絵 たかどのほうこ 福音館書店(1989)